

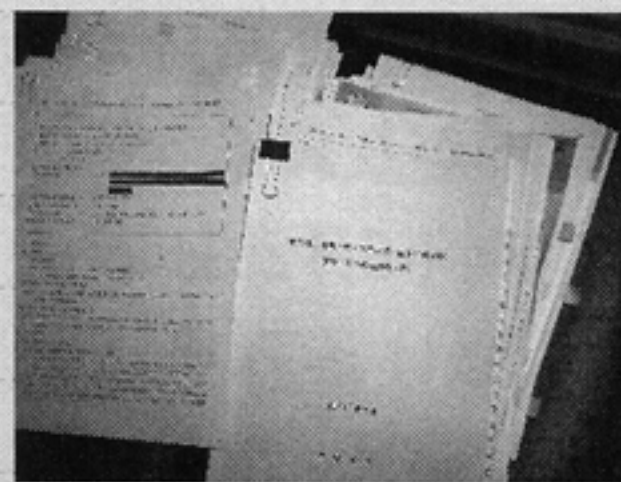
形骸化した懇談会が下北沢を破壊する

“Save the 下北沢”の勉強会があぶりだすもの

既存の商店街のど真ん中を貫く新規道路補助54号線とそれに伴う高層化を誘導する地区計画で危機に瀕している下北沢で、修復型のまちづくりへの転換を訴える“Save the 下北沢”は、昨年末から勉強会を企画している。

年明け早々の1月5日に、北沢タウンホールで行われた第二回目のテーマは、小田急線の高架問題が起きた1984年に2町会4商店街の会員により発足した「下北沢街づくり懇談会」の議事録(要旨)の研究だった。

第1回から第53回までは、行政が情報を破棄したとの理由で開示されなかったため、実際にあたった資料は1998年の第54回から2007年の第127回までだったが、それでもA4の用紙で約800ページというボリュームで、コメンテーターを務めたI氏は、正月休みの大半を資料の読み込みに費やしたという。



読みこまれた800枚の資料

その結果明らかになったのは、懇談会がどんどん変質していく様子であった。1998年に懇談会が区長に提出した「下北沢街づくりグランドデザイン」は、基本的に歩行者中心で中層建築を主体とするヒューマンな街並形成を目指す素晴らしいものだったが、時を経るに連れ、本質は骨抜きにされている。

会議のあり方も、地区の住民の自発的参加の機会を保障する協議会への移行が発案されるたびに潰され、傍聴希望者も拒否する密室状態で、単に行政が「議論を重ねた」という既成事実をつくるための方便に懇談会を利用したという印象が強い。

下北沢の問題は、市民社会のルールを問い直す機会でもあるのだと痛感した。

(志田歩 | Save the 下北沢)